

NMSH TOPICS

— VOL.5 2017/4月 —



汲田 伸一郎 院長

今月の院長のイチオシ! 『高度救命救急センター』

断らない、諦めない姿勢で

人命救助に取り組む救急医療の“最後の砦”

重症救急患者を救うべく
間口を大きく広げ
地域医療のさらなる支えに

当院の救命救急科(CCM)は、平成5年に指定を受けた「高度救命救急センター」の役割を担うため、救急患者さんの治療のみならず、国内外で頻発する自然災害への対応や伊勢志摩サミットなど、国際的なイベントに対する医療支援も積極的にを行っています。

高度救命救急センターの医師は、日本救急医学会認定の救急科専門医はもちろん、外科、脳神経外科、整形外科、集中治療、外傷、脳卒中、中毒、内視鏡、脳血管内治療などの専門医資格を有するプロフェッショナル集団。そして医師だけでなく看護師、薬剤師をはじめ豊富なスタッフを配置し、東京や関東地区、さらには海外からの救急患者さんに対する治療も行うなど、まさに救急医療の「最後の砦」としての役割を全うしています。

入院している方の多くが心肺危機状態、あるいはその危険性の高い重症救急患者さんで、年間の入室患者数は約1800人。疾患別に見ると、多発外傷など重症外傷が約

20%、脳卒中、広範囲熱傷、急性中毒、急性腹症、各種臓器不全および心肺停止が半数を占めます。

こうした三次救急医療施設としての責任の大きさと向き合い、東京消防庁からの救急患者収容要請や、二次救急病院の先生方からの転送依頼を「原則として断らない」方針を開設計時から貫いてきました。

当院の高度救命救急センターがより一層、地域の救急医療を担う初期・二次救急医療機関のお役に立てるように、「高度救命救急センター専用ホットライン」を開設しています。転院のご相談など、お気軽にお問い合わせください。

多臓器不全、脳卒中、敗血症、多発外傷
治療に難渋する患者さんがおられたら

「高度救命救急センター」
専用ホットライン

03-5814-6699

【お問い合わせ：救命救急科】

TEL：03-3822-2131(代表) FAX：03-3821-5102(専用)

目次

腎臓内科	・・・	P2
リウマチ・膠原病内科	・・・	P3
小児科	・・・	P4
皮膚科	・・・	P5

麻酔科・ペインクリニック	・・・	P6
形成外科・再建外科・美容外科	・・・	P7
放射線科/看護部	・・・	P8

腎臓内科



腎臓内科 部長
鶴岡 秀一

1989年日本医科大学卒業。2013年当院腎臓内科部長、日本医科大学大学院腎臓内科教授に就任。腎臓病、透析療法、高血圧が専門で、腎臓疾患の薬物療法に関する著書が多く、その適正化を推進している。

腎臓病の進行抑制から透析療法 難治性腎臓疾患まで幅広く診療

POINT
1

慢性腎臓病の早期診断・早期治療で
透析を避ける進行抑制に力を注いでいる

POINT
2

血液透析、腹膜透析の両方に対応し
新規透析導入だけで年間 80 人の豊富な実績

POINT
3

外来維持透析専門の「日本医科大学腎クリニック」
や腹膜透析専門外来など利便性に配慮

医療技術の進歩により 多発性嚢胞腎は早期治療で進行抑制も可能に

当科の対象疾患は、急性腎不全、慢性腎臓病（CKD）、高血圧、糖尿病性腎症、慢性糸球体腎炎、ネフローゼ症候群など腎臓疾患全般です。特に人工透析になる前の、腎不全の進行抑制に力を注いでいます。慢性腎臓病の方は、基礎疾患として糖尿病や高血圧など生活習慣病のある場合が多く、他科とも緊密に連携して基礎疾患を管理するとともに、腎臓疾患の知識が豊富な看護師・管理栄養士と協力し、食事や生活面の指導をしています。また、小児期に発症した慢性腎炎の継続治療も引き受けています。遺伝性の多発性嚢胞腎は、従来は進行と透析導入が避けられないといわれてきましたが、現在では腎機能低下の始まる時期から適切に治療すると、進行が抑制できるようになりました。

透析については血液透析、腹膜透析の両方から、個々の患者さんに適した方法の導入

が可能です。そのためシャント手術、カテーテル留置術などは当科と外科が共同で行っています。腎不全の新規透析導入は、年間約80人（平成28年1月～12月）の実績を誇ります。腹膜透析は基本的に在宅で行いますが、月に2回程度は通院の必要があり、スムーズに受診いただけるように専門外来を設けていることも特徴。また、当院から徒歩10分の場所に、外来維持透析専門の日本医科大学腎クリニックがあり、希望すれば同クリニックで継続して透析を受けることもできます。

腎不全は生活習慣病の最終段階で現れる症状のため、専門医への紹介が重症化してからになりがちです。軽症なら進行を遅らせることも可能で、別の原因が腎機能低下につながっている場合もあります。重症化する前に、ぜひ一度ご紹介いただきますようお願いいたします。



チームが一丸となって、すべての内科的腎疾患、腎不全に対して、きめ細かな診療を心がける



同院と連携する「日本医科大学腎クリニック」。徒歩圏内に位置し、利便性が高い

<対象となる主な疾患>

- ・急性腎障害（急性腎不全）
- ・慢性腎臓病（慢性腎不全）
- ・糖尿病性腎症、慢性糸球体腎炎（特にIgA腎症）、ネフローゼ症候群、腎硬化症、膠原病による腎障害、間質性腎炎など
- ・遺伝性腎疾患（特に多発性嚢胞腎、ギッテルマン症候群）
- ・高血圧
- ・水・電解質異常
- ・維持透析患者の透析関連合併症



リウマチ・膠原病内科 部長
桑名 正隆

1988年慶應義塾大学医学部卒業。米国留学、慶應義塾大学医学部准教授等を経て、2014年から現職。日本医科大学大学院アレルギー膠原病内科教授を兼任。

地域医療機関と連携し、リウマチ・膠原病の早期診断・治療で寛解へ

POINT
1

寛解導入が可能となったリウマチ・膠原病の診療で早期診断・治療に尽力

POINT
2

難治性病態も数多く受け入れ 治験も含めた先進的な治療を積極的に行う

POINT
3

ステロイド使用を最小限にとどめ 副作用の極小化をめざす

更年期前後の女性では、関節のこわばりや冷え性など、膠原病の徴候が見落とされがち

当科はリウマチ性疾患を含めた膠原病を幅広く診療しています。進行性で治らない難病、ステロイドの副作用に苦しむ疾患というイメージが強い膠原病ですが、ここ10年で治療法は飛躍的に進歩し、寛解が望める疾患となりました。重要なのは、早く診断して早期に治療を開始するほうが、治療効果が高いということです。早期では典型的な症状が少なく、専門の医師による的確な診断が不可欠。その意味で当科は地域の医療機関との連携に力を注いでいます。

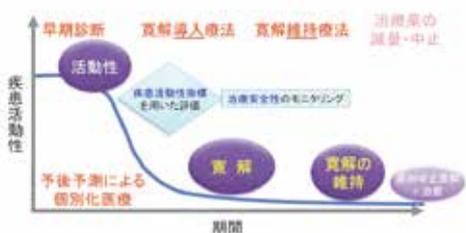
従来は、副作用の少ない薬から治療を始めて、効果がなければ段階的に強い薬に替えていましたが、現在は正反対の、早期に強力な薬を使って一気に寛解に持ち込み、それを維持しながら薬を減らしていくという考え方が主流です(下図参照)。寛解後はステロイドを速やかに減量、中止をめざします。早期に治療を始めた患者さんは、多く

が数年以内に薬をやめ、専門施設への通院の必要もなくなっています。

しかし、膠原病は進行してから治療しても寛解達成はなかなか難しく、強力な薬による副作用も避けられません。約3年前の調査では、患者さんは症状が出てから専門施設で膠原病と診断されるまでに平均で3年かかり、その間に平均3力所の医療機関を受診されていた。特に女性は40代が発症のピークですが、関節のこわばりや冷え性などが更年期症状と似ているために見落とされがちです。下表に示した膠原病の初期症状・兆候をご確認いただき、少しでも疑いがあれば遠慮せずご紹介ください。

また当科には、間質性肺炎、肺高血圧症、糸球体腎炎、血管炎などを有する難治症例が全国から紹介され、専門的な治療にあたっています。難治症例、ステロイドの副作用に困っている症例もご相談ください。

膠原病の治療戦略



膠原病を疑う症状

- ・関節の痛み・腫れ
- ・朝のこわばり
- ・2週間以上続く発熱
- ・筋肉痛・筋力低下
- ・手指や顔面の発疹
- ・繰り返し口内炎
- ・寒冷時に手指が白くなる(レイノー現象)
- ・手指の腫れ
- ・眼の乾燥(ドライアイ)
- ・口腔内の渇き(ドライマウス)



小児科



小児科 部長
伊藤 保彦

1983年日本医科大学卒業後、同大学小児科入局。
2012年日本医科大学小児科学教室主任教授・同大学付属病院小児科部長に就任。小児リウマチ・膠原病の研究と治療が専門で、2014年から日本小児リウマチ学会会長を務めている。

優れた総合診療力と高い専門性で 小児のあらゆる疾患に対応

POINT
1

小児の身体と心を全領域にわたって診療し
どんな疾患でも引き受ける

POINT
2

小児膠原病の専門診療を行う数少ない施設で
全国・海外から患者が集まる

POINT
3

日本医科大学の伝統を受け継ぎ
24時間体制でいつでも救急診療に対応

思春期医学にも力を入れ 15歳を超える患者も受け入れる

小児科は、子どもの身体と心を全人的に診る診療科です。日本医科大学の小児科は、伝統的にすべての領域を弱点なく網羅して、どんな疾患でも対応します。来院した方は通常は一般小児科外来を受診した後、血液・腫瘍、膠原病・喘息、循環器、内分泌・代謝、神経、腎・リウマチ、消化器・肝臓、頭痛、心身症、心理などの専門外来を受診いただいています。医療機関の先生方であれば、医療連携部門を通して、直接、専門外来の予約を取っていただくことも可能です。病名の診断までつかない場合でも、少しでも疑わしい、あるいは悩ましいといった症例がありましたら、遠慮せずに気軽に紹介ください。

伊藤保彦部長の専門分野である小児膠原病は、得意とする医療機関が非常に少なく、当科は患者数は少ないながらも、日本の小児膠原病診療におけるセンタリー的な存在と

なっています。循環器領域では、川崎病の冠動脈病変へのカテーテル治療やバイパス手術を積極的に行っていることで広く知られています。また、救急医療を重視することは日本医科大学全体の伝統ですが、当科でも24時間、いつでも対応できる体制を整えています。さらに、当科は小児だけでなく思春期の患者さんも診療しており、15歳を超えても思春期特有の心身の病気を診療しています。お困りの場合はぜひご紹介ください。

小児科では患者さんだけでなくご両親への配慮が重要で、患者さんの日常的なケアを行うご両親に対し、病気の説明や生活面の指導を特に丁寧に行う一方、信頼関係を築いた上で子どもの代弁者となって意見することもあります。それができるように、当科の医師は常に心のケアを意識しながら、診療に臨んでいます。



小児疾患についてのさまざまな問題に幅広く対応。子どもの身体だけでなく、心にも目を配る



子どもたちへのより良い医療の提供をめざし、24時間いつでも対応できる体制を整えている

<専門外来>

- 免疫・膠原病外来
- 血液・腫瘍外来
- 循環器外来
- 神経外来
- 内分泌外来
- 腎臓外来
- アレルギー外来
- 乳児フォローアップ外来
- 生活習慣病外来
- 乳児健診
- 呼吸機能外来
- 心理外来

皮膚科



皮膚科 部長
佐伯 秀久

1991年東京大学医学部卒業後、同大学皮膚科講師、東京慈恵会医科大学皮膚科准教授を経て、2014年当院皮膚科部長、日本医科大学大学院皮膚科主任教授に就任。専門はアトピー性皮膚炎、乾癬、皮膚免疫、遺伝子多型解析など。

地域の医療機関との連携を推進し あらゆる皮膚疾患に対応

POINT
1

手術、レーザー治療、薬物治療などを駆使しすべての皮膚疾患に幅広く対応

POINT
2

9つの専門外来を開設し各スペシャリストが専門性の高い診療を提供

POINT
3

皮膚腫瘍、美容、乾癬・アトピー性皮膚炎を重点領域とし、診療体制を強化

生物学的製剤を用いた新しい治療で 難治性の乾癬にも積極的に対応

当科はすべての皮膚疾患を対象とし、手術やレーザー治療も含めて幅広く診療しています。また、より高度な専門診療を提供するため、各領域のスペシャリストが皮膚外科、美容皮膚科、アレルギー・アトピー性皮膚炎・乾癬、真菌、爪、水疱症、美容レーザー、乾癬の9つの専門外来を開設していることが特徴です。

中でも、皮膚外科、美容皮膚科、アトピー性皮膚炎・乾癬の専門外来は注目されています。皮膚外科では、帆足俊彦准教授を中心に、良性・悪性の皮膚腫瘍や難治皮膚疾患に対し、全身麻酔・局所麻酔で積極的に手術を行っています。日本医科大学武蔵小杉病院の皮膚病理理専門家と連携しての正確・迅速な診断も特徴。美容皮膚科では、船坂陽子教授を中心に、皮膚科的な診断に基づきレーザー治療やケミカルピーリング、外用薬などを、疾患や皮膚の状態によって細かく使い分け、しみ・しわ・

ほくろ・にきびの治療や脱毛などを行っています。保険診療・自由診療どちらにも対応していることも特徴です。

部長である佐伯秀久主任教授が担当するアトピー性皮膚炎・乾癬外来では、重症の乾癬に対する生物学的製剤を使った治療や新しい薬剤による臨床試験、アトピー性皮膚炎に対する薬剤や紫外線を用いた治療などを行っています。これらの疾患では、長年重い皮膚症状に悩まされる方も多いため、生活面の指導や精神的なケアを心がけています。

皮膚症状から全身性疾患が見つかることもあり、他科とも緊密な連携を取っています。また、当科は地域の医療機関との連携を重視して、学外に開かれた研究会や講演会も多数開催しています。皮膚の症状でお困りの症例がございましたら、どのようなものでも気軽に紹介ください。



皮膚科の各領域をカバーするスペシャリストがそろう

佐伯秀久 大学院教授	部長 (乾癬、アトピー性皮膚炎など)
船坂 陽子 教授	外来医長 (美容、色素異常症、光線過敏症など)
藤本 和久 准教授	医長 (接触皮膚炎、蕁麻疹など)
帆足 俊彦 准教授	病理医長 (皮膚悪性腫瘍、皮膚外科など)
高山 良子 講師	医局長 (皮膚病理、美容など)
助教 7名	(乾癬、爪疾患、真菌症、水疱症など)
専修医 4名	
大学院生 5名	
留学 3名	
非常勤医 7名	
休職 9名	

専門外来 (午後)	
アトピー性皮膚炎・乾癬: 佐伯 (月・金)	皮膚外科: 帆足 (月)
美容: 船坂 (火)、高山・加藤 (金)	アレルギー: 藤本 (月・水)
美容レーザー: 高山 (月)	真菌: 田原・白川 (金)
爪外来: 白川・田中 (水)	水疱症: 船坂 (水)
乾癬: 伊藤・藤本 (水)	
手術 帆足 (月・水・土)・高山・赤野 (月)	
光線治療 (NB-UVB) (月～土)	



麻酔科・ペインクリニック 部長

岸川 洋昭

1995年日本医科大学卒業後、同大学麻酔科入局。
同大学千葉北総病院、三井記念病院、スウェーデン・カロリンスカ研究所を経て、2014年日本医科大学付属病院麻酔科・ペインクリニック講師。
2017年2月に同科部長就任。

手術麻酔、集中治療、疼痛治療の 3本柱

POINT
1

患者さんが、痛み・苦しみ・不安を感じない治療をめざす

POINT
2

医療技術の高度化に柔軟に対応し
手術や集中治療における安心と安全を提供

POINT
3

ペインクリニックと緩和ケアで
痛みをコントロールし、QOLを高める

帯状疱疹は早期治療が効果的 診断後はできるだけ早く紹介を

麻酔科・ペインクリニックは、手術麻酔、集中治療、疼痛治療を担当する診療科です。その役割は、一言で表現するならば「安心と安全の提供」です。例えば生命に関わるような急変時に、救命救急科・心臓血管集中治療科と協力して対応しています。

平成28年1月～12月に当院で行われた手術のうち7673例が麻酔科・ペインクリニック関与症例であり、内視鏡手術、ハイブリット手術など新しい術式への対応も含め、それぞれの術式・手術部位に応じた適切な麻酔法を選択し、術中管理を行っています。

集中治療室では、術後の患者さんや呼吸不全・敗血症の患者さんの全身管理を当科医師が行っています。手術室で培われた、きめ細かな患者ケアを行う姿勢を大切にして、手術を担当する各科主治医、看護師、臨床工学技士などとともにチーム医療を推進し、痛

みや不安を感じさせない治療をめざしています。

ペインクリニック外来では、急性・慢性疼痛の治療を行っています。患者数が多い症状は、帯状疱疹疼痛、帯状疱疹後神経痛、脊椎疾患による疼痛などで、神経ブロック療法、薬物療法で痛みを軽減を図っています。多くの疼痛は、早期に治療を開始するほど治療効果が高くなりますので、帯状疱疹などは痛みが出てからではなく、診断をつけた時点でできるだけ早くご紹介ください。もちろん半年、1年と長引く痛みにも対応します。

また、緩和ケア科では、主治医と連携した緩和ケアチームで、外来・入院を問わず、がん患者さんの疼痛・苦痛を和らげる医療を行っています。
疼痛治療に関しては、関連診療科と連携して診断することも可能ですので、遠慮なくご相談ください。



チーム医療を大切に、患者、看護師、医師らの多角的な視点を持って治療にあたる



超音波ガイド下末梢神経ブロックなどで、痛みや不安を感じさせない治療をめざす



各科と連携し、術式や部位に応じた適切な麻酔法を選択している



形成外科・再建外科・美容外科 部長

小川 令

1999年日本医科大学卒業後、同大学形成外科に入局。米国ハーバード大学留学を経て、2015年から現職。日本医科大学大学院形成外科主任教授を兼任。専門は熱傷・瘢痕治療、マイクロサージャリーを用いたリンパ浮腫治療など。

先天異常や病気・けがによる体表組織障害など幅広く悩みに応える

POINT
1

形成外科、再建外科、美容外科のあらゆる領域を7つの専門診療グループがカバー

POINT
2

年間1500件におよぶ手術実績は当院の診療科の中でもトップクラス

POINT
3

ケロイド・瘢痕・拘縮治療で全国的に知られ年間延べ1万人以上が通院

傷痕を目立たなくするためには
早期に治療を開始することが重要

当科は保険が適用される形成外科・再建外科と自由診療の美容外科の両方を有しており、広義の形成外科領域をすべてカバーする診療科です。口唇裂・口蓋裂、小耳症、多合指症など先天異常のある組織を形成する形成外科、病気やけがで作る形成外科、病気やけがで機能を失った組織を復元する再建外科、見た目に美的な付加価値を付ける美容外科の3領域を網羅。専門診療グループは美容外科、手の外科、乳房再建、頭頸部再建、熱傷瘢痕治療、頭蓋・顎・顔面外科、慢性潰瘍治療の7グループがあります。年間手術件数は約1500件(平成28年1月〜12月)で、当院の中で1、2を争う手術の多い診療科です。

当院には高度救命救急センターがあるため、特に熱傷・外傷治療後のケロイド、肥厚性瘢痕、拘縮などの治療には力を入れてきました。これら傷痕治療の新規患者数は年間約2000人(同)に上り、延べ

1万人以上(同)が全国から通院しています。瘢痕の治療で高い技術と経験を有していますので、ほくろや皮膚腫瘍の切除などでも、術後の整容面に細心の注意を払っています。目立つ場所にあるほくろや皮膚腫瘍、切除後の傷痕にお困りの症例は、ぜひ当科にご紹介ください。特にケロイドはこれまで治らない傷痕といわれてきましたが、当科で研究や治療法の開発を進めた結果、目立たなくすることが可能になってきました。

傷痕の治療には手術の他にもさまざまな方法があり、治療を開始する時期が早ければ早いほど、効果的に目立たないように整容することができ、できるだけ早くご紹介ください。また、外科、皮膚科、産婦人科などの先生方には、患者さんに当科での術後の傷痕治療を提案していただきたいと思います。



形成外科、再建外科、美容外科のあらゆる領域を網羅



7つの診療グループが専門性を生かした治療に日々取り組んでいる

<対象となる主な疾患>

- ・新鮮外傷、新鮮熱傷
- ・顔面骨折および顔面軟部組織損傷
- ・手、足、口唇裂・口蓋裂、小耳症などの先天異常
- ・母斑、血管腫、良性腫瘍
- ・悪性腫瘍およびそれに関連する再建
- ・瘢痕拘縮、ケロイド、肥厚性瘢痕
- ・リンパ浮腫、眼瞼下垂
- ・褥瘡、難治性潰瘍
- ・美容外科全般

放射線科



放射線科 技師長

土橋 俊男

1978年日本医科大学付属病院に診療放射線技師として入職。1987年からMRIを担当し、2005年に放射線科技師長就任。画像診断と放射線治療の品質と安全管理に力を注いでいる。



CTや放射線治療装置をはじめ、先進の医療機器を完備。操作技術に優れた技師による精密な検査が行われている

POINT 1 放射線被ばくを最小限に抑えつつ
診断しやすい検査画像を作成

POINT 2 線量などの品質管理を徹底し
より安全な放射線治療を実施

専門性の高い技師を配置 24時間体制で救急にも対応

当科では67人の診療放射線技師が、安全で的確な画像検査と放射線治療の提供に尽力しています。3階フロアには救急専用の検査装置がそろい、血管撮影、CT、MRIなどに24時間体制で対応していることも大きな特徴です。最近では各分野に専門技師制度が発足。当院には一般撮影、CT、MRI、血管撮影、核医学、放射線治療の全部門で専門性を有する技師がそろい、一方、夜間救急に求められるオールマイティな対応力を持つ技師もそろっています。

デジタル画像では、同じ部位を同じ線量で撮影した場合も、撮影後の画像処理の違いでまったく異なる画像になります。できるだけ低線量で、目的の診断に役立つ画像を提供することが技師の使命です。被ばくを気にする患者さんの不安に対応できる技師もいますので、安心してご紹介いただくとともに、お困りのことがあればご相談ください。

看護部



看護部 がん看護専門看護師

深田 陽子

がん専門病院勤務後、大学院に進学。2007年から日本医科大学付属病院勤務。がん患者・家族の相談と放射線治療、がん看護の教育に携わっている。日本看護協会ががん看護専門看護師。

POINT 1 がん看護専門看護師をはじめ
がん各領域の認定看護師が多数在籍

POINT 2 がんを疑う時期から終末期まで
患者と家族を総合的にサポート

院内外を問わず、 がん患者の支援に力を入れる

当院には平成29年2月現在、日本看護協会のがん看護専門看護師3人と、同協会のがん性疼痛看護、がん化学療法看護、がん放射線療法看護、緩和ケア、乳がん看護などの認定看護師が多数在籍し、協力して高いレベルのがん看護を提供しています。がん看護専門看護師は、患者支援センター、外来化学療法室、緩和ケア科、放射線治療科で患者さんとご家族を総合的にサポートしています。

最近では外来で症状の説明、がん治療を行うことが多く、仕事や家事との両立に悩む患者さんを看護師が支援する場面も増えていきます。確定診断の前に不安を訴える、がんと付き合うための情報を望む患者さんなどがいましたら、当院の患者支援センターをご紹介します。当院で治療していない患者さん、電話や面談にてご相談をお受けし、必要な支援の提供や専門の窓口におつなぎします。



高い専門性を持ちつつも、心通うケアを忘れないように努めている